

平成23年11月21日

生駒市議会議長 井上充生 様

環境文教委員会委員長 山田正弘

## 委員会調査報告書

当委員会で調査した事件の調査結果について、生駒市議会会議規則第107条の規定により、下記のとおり報告します。

### 記

1 事 件 教育現場の現状（体力向上の取組と不登校・引きこもり対策）

2 概 要 別紙のとおり

(1) 派遣期間 平成23年10月24日(月)～25日(火)

派遣場所 愛知県刈谷市及び豊橋市

派遣委員 山田正弘 中浦新悟 浜田佳資 恵比須幹夫 樋口稔  
山田耕三

(2) 派遣期間 平成23年10月26日(水)

派遣場所 大瀬中学校及び生駒中学校

派遣委員 山田正弘 中浦新悟 浜田佳資 恵比須幹夫 山田耕三

(3) 派遣期間 平成23年11月1日(火)

派遣場所 生駒台小学校

派遣委員 中浦新悟 浜田佳資 恵比須幹夫 樋口稔 山田耕三

(4) 派遣期間 平成23年11月2日(水)

派遣場所 鹿ノ台小学校

派遣委員 山田正弘 中浦新悟 浜田佳資 恵比須幹夫 樋口稔  
山田耕三

別紙

環境文教委員会 視察報告書

1 教育現場の現状（体力向上の取組と不登校・引きこもり対策）

平成23年10月24日(月)

視察先	愛知県刈谷市
視察の目的	生駒市では、子どもの体力低下や不登校・ひきこもりが問題となっている。そこで、先進地の制定・策定過程や特色などを視察して、今後の本市の施策の参考とする。
施策等の概要	<p>●<u>体力向上の取組み</u></p> <p>地域的にスポーツに対する意識が高いが、子どもたちの体力は全国的に必ずしも高いとは言えず、市全体で子どもの体力向上に取り組んでいる。</p> <p>(1) 小・中学校における児童・生徒の体力の実態について</p> <p>刈谷市は人口が約14.5万人で生駒市よりやや規模が大きく、6中学校、15小学校を擁する。</p> <p>平成20年度の全国体力テストの結果によると、小・中学校とも多くの種目で県平均（県平均は全国で23～42位と決して高くない）を下回っていた。平成21年4月に就任した太田教育長（体育教師出身）は、この状況に危機感を抱き、刈谷市全体での体力向上への取組みに着手する。その結果、平成23年度の体力テストでは、多くの学年・種目で県・国平均を上回るに至っている。</p> <p>(2) 学校内での取組について</p> <p>ゴールデンエイジ（小学校低学年～高学年）の時期の子供たちに多種多様な運動や外遊びを経験させ、体の様々な機能を覚醒させることが大切であることから、体力向上プロジェクトを立ち上げ、以下、三本柱の事業を展開し、児童・生徒の体力向上を目指されている。放課後は部活動が活発であり、小学校では男子はサッカー、女子はバスケットが中心で基礎的な体作りをしている。中学校では8割の子どもが運動部に所属している。</p> <p>①体育の授業の充実</p> <p>平成23年度から、身体と脳・神経系のバランス良い発育を促し、運動の習得効果を高めるための「コーディネーショントレーニング」を導入。幼稚園、保育園、小中学校の先生は講習会に参加し、同トレーニングを学び、体育等の授業の始まりに毎時間取り入れられている。</p> <p>②運動機会の設定と外遊びの奨励</p> <p>2～3時間目の間の休み時間を長くする。外遊び集会、外遊びカード等の情報収集を行っている。外遊びカードは、各学校の裁量で種目・級</p>

の設定などがなされている。

### ③生活習慣の改善

専用キャラクター「しょくまるファイブ」を活用し、食育推進に努めている。具体的には小学2年生を対象に、栄養教諭、学校栄養職員による指導を行っている。

### (3) 総合型地域スポーツクラブについて

同市で平成16年度から本総合型地域スポーツクラブ格実施されている「総合型地域スポーツクラブ」は、複数の種目が用意され、子どもから高齢者まで、初心者からトップレベルの競技者まで、そして健康志向の人から競技志向の人まで誰もが参加しスポーツを楽しめるよう工夫されている。

各中学校区単位で総合スポーツクラブが設立され、活動を展開している。このクラブに、地元の大学、企業のクラブチームから指導者が来て指導しており、レベルの高い活動も行われている。

平成23年8月31日現在で市内1807人が加入。家族加入だと年間1万円以内で多様なスポーツが楽しめる。

### (4) 部活動指導者育成活用事業について

市内全中学校の柔道、弓道、水泳を中心に専門的な指導ができる顧問が手薄な学校を支援するために、「刈谷市部活動指導者活用事業」を平成19年度から実施している。基本的には、教職が指導に当たっている。

指導員の報酬は1時間あたり1010円を基本としており、平成22年度は総計300時間の実績。

## ●不登校・ひきこもり対策

刈谷市の不登校は、この10年間で半減し、全国平均、愛知県平均より少なくなった。スクールカウンセラーの県からの派遣と学校教育活動支援指導補助員を増やすとともに、心の教室などの運営を行っている。

「新たなひとりを出さない」をスローガンに、適応指導教室の増設などを行っている。「分かる授業 学力をつける授業」では非常勤講師を導入するなど、特に、学級経営と授業の充実を重視している。

### (1) 不登校・ひきこもりの実態と原因の分析について

#### ①不登校の全児童・生徒に占める割合(平成23年9月末現在)

中学校：1.76% 小学校：0.17%

⇒いずれも県・全国平均を下回っている。過去、中学校で最も割合が高かったのは平成13年で、4.2%にのぼっており、県・全国平均を上

	<p>回っていた。</p> <p>②同市の実施したアンケートによると、不登校となったきっかけと考えられる状況は無気力、遊び・非行、不安などが多い。</p> <p>(2) 不登校・ひきこもりに対する取組みについて</p> <p>①いじめ・不登校、特別支援教育対策委員会 ⇒月 1 回開催、全職員が参加。情報を共有化し、対応策を話し合う。市教育委員会にも報告。</p> <p>②学級経営の充実 ⇒クレペリン検査(一けたの数字を、連続的に加算する作業を行わせ、その結果によって性格や適性を判断する検査)、Q-U テスト(学級集団の状況と生徒個人の学習意欲とを分析する方法)を行い、学級編成や児童・生徒理解に生かしている。</p> <p>③いじめ対策カウンセリング研修会の開催 ⇒小学校が年 1 回、中学校 2 回開催。市教育委員会にも報告。</p> <p>(3) 関係機関との連携について</p> <p>①スクールカウンセラーの県からの派遣 ⇒平成 22 年：6 中学校、3 小学校、相談総数 1501 件</p> <p>②学校木養育活動支援指導員の配置 ⇒平成 22 年：20 人(小学校に配置)。発達障害児に対応。ボランティアによる。</p> <p>③心の教室相談員による相談 ⇒大学生、大学院生が生徒の相談に乗り、ストレス、不安を解消。</p> <p>④心の居場所づくりアドバイザー ⇒平成 11 年から 1 中学校で実施。専門の心理士が生徒、保護者、教員にアドバイスや相談活動を行う。</p> <p>⑤子ども相談センターの開設 ⇒平成 25 年開設を予定。3～19 歳までを対象とする。子ども・若者支援法に対応。</p>
<p>考察、意見</p>	<p>●<u>体力向上の取り組み</u></p> <p>体力向上にはこれといった速効性のある解決法はない。</p> <p>刈谷市での幼児期から小学校高学年を、神経系の発達が著しい時期と、一生に一度だけ訪れる即座に運動技能の獲得が可能な時期に分け、それぞれ重要視し、子どもの発達段階に応じた多種多様な運動や外遊びを経験させるとする発想を明確に取り入れ、具体化している。</p> <p>⇒生駒市版の体力向上プロジェクトの立ち上げ</p>

同市は、体育に関連する学校施設が大変充実している。グラウンドも必要十分以上の広さが確保されており、運動部はほぼすべての種目が全中学校に存在する。

その様な環境が伝統的に整っており、その上に総合型地域スポーツクラブの活動も成立していると考えられる。

生駒市においては、ハード面の充実を含めた、中期的視野に立った抜本的な対策が求められる。

⇒地域にあるハード・ソフト両面のスポーツ資源を掘り起こし活用する。

(例えば、近畿大学と提携し大学のグラウンドと人材を活用することは、少子化の中で学生確保に力を入れている大学の利益とも合致し、検討の価値ありと考える。)

生活習慣の改善が大切である。給食についても毎日、朝ごはんを食べている生徒は全国で85%と給食を残さないという「たべ残しゼロ運動」に取り組んでいる。

#### ●不登校・ひきこもり対策

##### ・学級経営の充実

⇒クレペリン検査、Q-Uテストの実施は生駒市でも要検討。

・心の教室相談員の活動は生駒市でも検討の価値がある。

・心の居場所アドバイザー制は、生徒のみならず保護者も対象としており、現実に即している。

刈谷市では、いじめ・不登校対策に関しては、多様なメニューをそろえ、実態的なカバーに努められている。不登校対策は、学校への多チャンネルでの対応する人材投入が必要であることは明確となり、ここに労を惜しんではならない。

平成23年10月25日(火)

視察先	愛知県豊橋市
視察の目的	生駒市では、子どもの体力低下や不登校・ひきこもりが問題となっている。そこで、先進地の制定・策定過程や特色などを視察して、今後の本市の施策の参考とする。
施策等の概要	<p><b>●体力向上の取り組み</b></p> <p>52小学校、23中学校（内、1校は私立）あり、教育委員会として体力向上に力を入れ、さまざまな取り組みを行っている。全市の小学校を対象に7月から12月にかけて、4種の大会を設定し、児童が年間を通じて多様な運動経験ができるよう配慮している。種目により、32校から49校が参加している。</p> <p>学校の運動場が広く、野球やサッカーなど他種目の部活動が同時に練習できる恵まれた環境にある。ほとんどが平野部である豊橋市の特徴とも言える。</p> <p>(1)児童・生徒の体力や運動能力の低下は歯止め傾向にあるものの、ピークであった昭和60年頃と比べると依然、低い水準にあると分析されている。体力・運動能力測定の種目によって差があり、全国・県平均より低い部分について教科体育のあり方を検討するなどの方策がとられている。</p> <p>体力テストの実施、調査、集計、分析を教育委員会が行い、各校へ結果をフィールドバック。それを基に各校独自の体育時間計画を作成する。</p> <p>(2)小学校の部活、全市行事の充実</p> <p>「陸上競技」、「水泳競技」、「球技(バスケット(男女)、サッカー(男子)、バレー(女子))」、「駅伝」という4つの大会が催されており、児童が年間を通じて多様な運動に参加できるよう工夫されている。</p> <ul style="list-style-type: none"><li>平成23年度(52校中参加 陸上競技49校,水泳競技49校, サッカー47校、バレー32校バスケ40校,駅伝46校)</li><li>位置づけ：日頃の体力作りの取組、運動部活動の成果を試す場</li><li>大会の実施は部活のあり方にも反映されている。</li></ul> <p>(3)各小学校での独自の取組</p> <ul style="list-style-type: none"><li>○独自の体操を考案し実施。</li><li>○耐寒かけ足運動、縄跳び運動など業前、業間運動を実施。</li><li>○一輪車、竹馬、長縄をほとんどの学校で常備。</li></ul> <p>隣接する学校で対抗戦を行うことなど、子どもたちの意欲を引き出す取り組みを行っている。</p> <p><b>●不登校・ひきこもり対策</b></p>

(1)不登校・ひきこもりの実態と原因の分析について

豊橋市は小学校 52 校、中学校 23 校の合計 75 校があり、約 3 万 4000 人の児童・生徒が学んでいる。

平成 22 年度、児童生徒数に占める不登校の割合は、小学校：0.46%、中学校：3.55%でいずれも県・全国平均を上回っている。

不登校の原因は小・中学校とも不安等の情緒混乱、または複合が多くなっている。22 年度と比べ、中学校では遊び・非行を理由とする生徒数が増加している。

(2)不登校・ひきこもりに対する取組について

①②③を柱に対策を進めている。

①「人的支援を活かした取組み」

児童生徒支援対応教員の加配(県施策)、不登校対策支援非常勤講師の配置(市独自)、生活サポート主任の配置(全中学校に 1 人)を行っている。生活サポート主任は、生徒指導や教育相談、適応指導を統括する。そのために、関係職員や医師、臨床心理士、保護者などによる生活サポート委員会の設置が進められている。

②「目の前の一人を救う取組み」

適応指導教室「麦笛ひろば」の設置・運営、不登校の児童生徒への家庭訪問を行うメンタルフレンドの派遣、教育相談室の開設、不登校を考える親と教師の懇談会の開催などが行われている。

③「新たに一人を出さない取組み」

関係者 23 人(教員, 医師, 臨床心理士, 保護者代表等)の委員により構成する不登校対策協議会の設置し、幼少期から 10 年後を見据えたスパンで協議し答申している。他、関係する 33 人の委員で構成する不登校問題対策委員会の設置・運営、予防的不登校対策に関わる研究の推進(研究校を指定)、生活サポート主任の資質向上(各研修年 6 回)等を進めている。

その他取組み

- ・放課後留守家庭児童の居場所づくりとして、放課後児童クラブを、公営・民営で設置。
- ・すべての小学生を対象に、放課後子ども教室を地域の参画を得て実施。

(3)子ども・若者支援地域協議会について

「とよはし子ども・若者育成プラン」を作成し、子ども・若者の自立をはぐくむ取組みを行っている。豊橋市子ども・若者支援地域協議会を設置し、年 2 回程度の代表者会議とともに月 1 回程度の各構成機関の相談員

	<p>が集まる実務者会議を行い、情報交換・取組状況の共有化を図っている。</p> <p>【若者支援地域協議会】・・・平成22年11月、子ども・若者支援法にもとづき設置。矯正・更生保護、教育、保健福祉、医療、雇用、地域、支援団体および行政分野の28団体で構成される。市教育委員会生涯学習課が窓口となる。NPO法人を指定支援機関に認定している。</p> <p>今年度の活動としては、まず連携が課題となっている豊橋市域の高校の生活指導担当員に協議会の取組を説明。支援機関マップを配布し理解を深める方策がとられている。総合相談窓口には、医師や臨床心理士など医療的見地からアドバイスできる職員を配置。支援機関への紹介を行っている。また、実務者会議として地域協議会を構成する関係支援機関の実務担当者に参加してもらい、実務的競技事項を検討している。</p>
<p>考察、意見</p>	<p>●<u>体力向上の取り組み</u></p> <p>・生駒市と同様に豊橋市でも、児童、生徒の身長、体育などの伸びに対して、体力、運動能力は低いといわれている。子供達の遊び場所の減少や少子化、学校以外の近所の友達が放課後も塾通い等になり、宅内の遊びが中心である。</p> <p>刈谷市と同様に県の施策を活用し、教育委員会が中心となり各校へ働きかけている。体力テストの結果を市がまとめ、各校へしっかりと下ろすことにより、学校独自で詳細なプログラムを作成し、各学年に応じた内容で体育授業に生かしている。また、学校の体育祭を春に行い、夏以降は市の大会へ参加する。</p> <p>⇒愛知県の土地柄で、刈谷市も豊橋市もスポーツに対する意欲が高い。これが、スポーツに対するさまざまな取り組みを推進する原動力となっている。この点運動場の広さの点などが生駒市とは異なるので、それを踏まえて参考とすべきである。</p> <p>⇒小学校における体育関連の全市行事の通年開催は、生駒市も参考にすべき。運動機会の拡大のみならず、人的交流、地域のつながりの深まりといった効果を期待できる。</p> <p>⇒小学校の部活、全市行事に関する取組みは特筆すべきもので、是非生駒市でも検討すべき。小学校で運動に接する機会が多いと、中学校の部活の拡大・充実にもつながるのではないかと期待される。</p> <p>⇒特に基礎的体力づくりという点では小学校が大切であるが、子どもたちが意欲をもって運動を行う、各種大会、学校の備品、他校との交流などの施策が充実している。この点は大いに参考とすべきである。</p>



●不登校・ひきこもり対策

豊橋市は人口も多く、ゲームセンター他、遊び場も多く、生駒市と違って深夜まで、店も開いている。

不登校には家族の問題、いじめ、学力不振等様々な要因がある。学校や地域での相談者を多く育成し、専門の施設を充実させている。

親と相談員が毎月教育会館で相談を行っているが、中学生の不登校が減少しないのは心配である。又、外国人の就労率も下がってきており、これも社会情勢と相まって連動している。若い人の社会的自立支援も遅れている。

支援には本人だけではなく、保護者の相談窓口を設け各種支援団体、NPOを活用している。本年より相談の受付窓口を一つにし、不登校だけではなく、社会参加に向けた支援、就労に向けた支援までを取り扱う。相談内容にあった最適な施設を紹介し、そこで専門家が相談にのるシステムである。

⇒若い人にはベテランより、若い身近なリーダーが親身になって相談出来る、相談員を育成する必要があると感じました。

⇒不登校・引きこもりについては、就労の問題も含め、小学校期から30歳代までの長期的、一貫したかつ総合的な施策となっている。これは、「子ども・若者支援地域協議会」の設立趣旨に表れており、この観点から、生駒市の見直しを行う必要がある。

⇒豊橋市でも、地域から孤立化する家庭・家族が問題となっており、共通の課題である。一朝一夕に解決する問題ではないが、先進地の苦労と経験をくみ取り反映していく探求が必要である。

⇒小・中学校の不登校児・生徒への対応の充実が、子ども・若者支援地域協議会の設置により取組みの継続性が出てくる。

⇒生駒市でも子ども・若者支援のより力を入れるべき。中学卒業とともに支援の流れが断ち切られると、実際の不登校やひきこもりに直面する当事者は途方に暮れてしまう。少数であるが確実に悩みを抱える人たちに手を差し伸べる施策を講じていくべきである。

## 2 教育現場の現状（体力向上の取組と不登校・引きこもり対策等）

平成23年10月26日(水)

視察先	奈良県生駒市大瀬中学校（平成23年10月26日(木)）
視察の目的	生駒市では、子どもの体力低下や不登校・ひきこもりが問題となっている。そこで、生駒市の現状を把握することが必要と考え、学校現場を視察して、今後の本市の施策の参考とする。
施策等の概要	<p>●<u>体力向上の取組み</u></p> <p>体力テストの結果は、3年生は全国平均より上、1～2年生は県平均を下回っている。個々の生徒にデータを開示し、自分がどの部分に劣っているか自覚させ、改善行動につなげるようにしている。</p> <p>市内では各中学校間で生徒数の格差が出ており、体育系の部活もばらつきがある。他校では生徒の減少に伴い部の種類減が起きているが、大瀬では、種類を増やそうとしている。そのために、外部指導者を手助けとして来てもらっている。ただ、この場合、その部の中でできる先生がいるからできる。その教師の数が減ったときに難しくなる。</p> <p>部活動には約8割の生徒が参加しており、その大半が運動部。</p> <p>運動部の場合、指導者の確保が課題となる。適切な指導者があっても、教師は新任で3～4年、ベテランでも5～6年で転勤となるので、持続性を確保するのが難しい。</p> <p>現在はバスケット部が人気。以前は陸上部も存在したが、指導者や運動スペースの問題から廃部となった。</p> <p>顧問の先生は希望制をとってはいるが、どこかの部には入ってもらっている。部によっては、土日試合で休みがなくなる場合があり、課題である。</p> <p>●<u>不登校・ひきこもり対策</u></p> <p>平成23年10月現在、不登校生徒数は7人。平成19年から22年度までは14～18人で推移してきた。</p> <p>入学してから不登校になる生徒が多い。人間関係で問題を抱えているケースが多く、執拗に登校刺激をすることが適切なのか迷うところだという。自己評価アンケートを取り、生徒の心の実態を把握している。</p> <p>不登校対策は、適用指導教室、いきいきホットルーム、スクールカウンセラーなど活用している。</p> <p>学校としては、担任任せにせず、学年集団でみるようにしているが、基本は担任の先生が主体となり、家庭訪問などで対応。</p> <p>一番の問題は、家庭に入って行きにくいことであり、地域の方をお願いするしかない、というのが現状である。家庭の問題についてはプライバシーに関わることなので、民生委員、自治会との連携も必要か。</p>

	<p>南中学校とは健全育成の合同推進委員会をもっている。小学校との連携は密にとっており、不登校児に関する情報も得ている。</p> <p>不登校の子どもも、中学校を卒業したら卒業生だから対応できない。高校からの連絡はほとんどない。</p>
委員の考察、意見等	<p><b>●体力向上の取り組み</b></p> <p>体力向上施策として、学校全体としての特別な取り組みは行っていない。体育クラブは、地元の方に外部指導者として、運営にご参加頂いている。部活運営は教師が行い、専門技術に関しては指導員が行っている。生徒の技術も高いものになってきている。平成22年度保護者アンケートでは、84%が「部活動に意欲をもって活動している」と評価。運動部加入者が男女ともに多い事が平均値を上げている。</p> <p>⇒運動場が比較的広いこともあるが、先生方の意欲的な取り組みがほとんどの生徒が運動部に入っている状況をつくっている。問題は、その先生方への支援体制を市としてどうするかであり、ここの探求が必要である。</p> <p>⇒比較的市内でも敷地が広く恵まれた環境にあると思われるが、陸上部はやはり廃部となっている。指導者の確保が課題である。</p> <p><b>●不登校・ひきこもり対策</b></p> <p>不登校・引きこもり対策として、家庭訪問を根気強く行っている。</p> <p>担任、学年主任校長が情報を共有し、保護者の話を聞きながら、生徒の様子を伺う。市のいきいきホットルーム（週1,2回通所）を活用しながら、学校への復帰をめざす。不登校の予防として無断欠席が3回を超える生徒には、学級担任より保護者に連絡をし、様子を伺う。早期発見により対応を素早く行うことを基本とする。</p> <p>地域の方との連携を図るため、地域ぐるみの児童生徒健全育成推進協議会を活用し、不登校を地域で見守る努力を成されている。また生徒自ら「クリーンキャンペーン」「あいさつキャンペーン」を行い、地域の一員として活躍している。</p> <p>⇒不登校などで、家庭に入って行きにくい点は全国共通である。地域のつながりの再生が課題である。もっとも、大瀬は子どもの安全対策やあいさつ運動など比較的地域と学校のつながりは強い。それでもこれが課題となる点がこの問題の困難さを表している。</p> <p>⇒豊橋市の一貫した長期的体制を生駒市でも構築することが、卒業後の子どもフォローとなる。</p> <p>⇒ひきこもり対策は、地域や医療、教育など多様な分野との連携がなければ進まないことを改めて実感した。</p>

平成23年10月26日(水)

視察先	奈良県生駒市生駒中学校
視察の目的	生駒市では、子どもの体力低下、不登校・ひきこもりが問題となっている。そこで、生駒市の現状を把握することが必要と考え、学校現場を視察して、今後の本市の施策の参考とする。
施策等の概要	<p><b>●体力向上の取り組み</b></p> <p>体力・運動能力測定では、男子は握力および50m走を除き県平均を下回っている。女子で県平均を上回ったのは立幅飛びのみ。この要因として、計測対象の現女子3年生は運動部への加入が26%と極端に低いことがあげられる。逆に現1年生は70%以上であり、期待できる。</p> <p>運動部に所属する生徒の割合は、ここ2年間年々増加しており、全体では57.5%であるが1年生は男子83%女子71%である。</p> <p>体力は、持久力がやや劣る傾向がある。この克服のため、「生駒中学校体力向上アクションプラン」を作成し、学校、家庭、地域との連携を図った取り組みを行っている。「GO!GO!持久力トレーニング!」週3回の体育時間10～15分。</p> <p>小さいときに外遊びをしていない子どもとそうでない子との体力の二極化の傾向がある。塾通いの子どもが多く幼稚園から運動能力の低下がある。なお、豊川市のような全校あげての体育行事の実施は現状、日程等を考えると困難な状況。</p> <p><b>●不登校・ひきこもり対策</b></p> <p>不登校は平成22年度、14人と多くなっていたが、23年度は10月末までに4人と、減少している。</p> <p>スクールカウンセラーの活用や家庭訪問を中心に対応している。</p> <p>対策は、小学校からの申し送り、1年時からの指導、家庭訪問の繰り返し、スクールカウンセラーが月2回来て対応。また、いきいきホットルーム通室を活用している。</p>
委員の考察、意見等	<p><b>●体力向上の取り組み</b></p> <p>運動場が狭く野球の一面が取れない。持久力が県平均より劣っており持久力(シャトルラン・持久走)をまずは県平均へ近づける目標で本年より取り組まれている。</p> <p>体力向上推進担当を設置し学校全体で体力向上へ取り組んでいく。また食生活の大切さを家庭との連携により図る。</p> <p>生駒中学校生は吹奏楽部(H23年全日本吹奏楽コンクール金賞)が有名であり、これまで多数が入部されていた。運動部はこれまで全生徒の5</p>

割に満たなかったが、本年は1年生の運動部への加入が男女とも高く(男子83%、女子70%)野球、バスケ、陸上、バレー、ソフトテニス、ソフトボール、野球へ多数入部した。

⇒体力は諸活動の基礎となり、特に持久力においてその面がある。この面での向上は中学校より遙か以前の幼児期から対策をとる必要が指摘されている。この点での生駒市の現状分析が必要である。

⇒総合的地域スポーツクラブは、地域のキーパーソンがいないと極めて困難であることが指摘されている。

⇒生駒中学校の場合は、運動場の狭さが大きなネックとなっている。豊橋市とは比べようもないほどだが、この「生駒谷」の宿命への知恵出しが必要である。

⇒生駒中学校は、生徒数が多いにも関わらずサッカー部がない。運動場が狭いということを経由に、運動種目の制限をかけるのには問題がある。知恵と工夫を駆使し、生徒がより運動に対し、自主的、継続的に関心を持ちやすくするための対応が必要であると考えます。

⇒生徒の体力向上は、運動部への加入と密接に関係していることがデータとして如実にあらわれている。やはり運動部の部活に対する支援、サポートをどのように行っていくかが今後の課題となる。

#### ●不登校・ひきこもり対策

不登校対策としては小学校からの申し送りを活用し1年時から指導を行う。原因は様々であるが個々の生徒の状況をしっかりと把握している。

2010年の不登校全国平均2.74%より、ほんの少し上回るが担任からの報告により校長へ不登校相談となる。基本は家庭訪問の繰り返し。

スクールカウンセラーへの相談、ほっとルームへの通学としている。

⇒不登校対策は、生駒市にある諸制度をよく活用されているが、スクールカウンセラーは需要に対して供給が少ない状況であり、ここに力を入れる必要がある。

### 3 教育現場の現状（体力向上の取組と不登校・引きこもり対策等）

平成23年11月1日(火)

視察先	奈良県生駒市生駒台小学校
視察の目的	生駒市では、子どもの体力低下や不登校・ひきこもりが問題となっている。そこで、生駒市の現状を把握することが必要と考え、学校現場を視察して、今後の本市の施策の参考とする。
施策等の概要	<p><b>●体力向上の取組み</b></p> <p>児童数が945名と多く、当然学級数も多く、運動場、体育館、プールの利用・使用に制約が大きい。体力測定では市の平均と同じ握力弱い、身体固い、投げも弱い。運動能力を上げ、体力が向上するよう働きかけている。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・他校との大きな違いは中休み・昼休みを十分に確保した校時設定にし、多くの児童が外で遊ぶこと。</li> <li>・徒歩を中心とした春の遠足。</li> <li>・夏休み中のプール開放やプール特別指導。</li> <li>・縦割り活動による遊び体験。</li> <li>・高学年のクラブ活動の確保。</li> <li>・体力づくりかけ足・おさめ会の実施など、県陸上記録会を目標に取り組む。</li> </ul> <p><b>●不登校・ひきこもり対策</b></p> <p>不登校は1～2人で推移している。</p> <p>児童の様子を校長へ、担任からの報告、連絡、相談を徹底している。児童のほんの少しの変化がみられたなら、担任が報告し相談できる体制を学校として取り組む。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・地域とのつながり、教育支援施設の活用。光明中のカウンセラー等校内支援委員会の設置</li> <li>・教育実習後の大学生に、学びのサポーター（有償）として週2回来てもらい、サポートの必要な子についてもらっている。担任だけでは対応できない子が増えている中で必要な人材。</li> <li>・不登校についての対策としては、月1回カウンセラーが来ているが少ない。引く手あまたの状況である。</li> <li>・ネグレクト傾向がある場合は、市のこどもサポートセンターゆうと連携して対応している。</li> </ul>
委員の考察、意見等	<p><b>●体力向上の取組み</b></p> <p>運動場は広大ではあるが、市内で一番の児童数、学級数であり、体育の授業に制限がある（体育館、プールの使用）。その分を休み時間を活用し遊びを通じて運動能力、体力の向上を図る。運動場は児童で一杯にはなるが</p>

ボール遊びや様々な工夫で全員が楽しく利用している。

体力についてはH22年5年—H23年6年と統計をとられている。男女で握力が大幅に下回っているが、男子の上体起こし、反復横とび、ソフトボール投げ、女子の上体起こし、前屈、反復横とび、立ち幅跳びがそれぞれ向上している。中休み。昼休みの時間を大幅にとることで運動場での遊びを通じ体力の向上を図った結果かも。担任と共に外遊びをすることで体力の向上を図る。  
長距離の徒歩通学者が在籍し、日頃より県陸上競技大会への出場を目標とする事により意識させる活動が結果として出てくるのはこれからである。

⇒児童数が多く一人あたりの運動量が確保しにくい中で、持久力が比較的良い結果を出していることから、学校の多彩な取り組みの効果を分析する必要がある。

⇒市内小学校の生徒数アンバランスや人数過多の問題は、解決のためには本来校区変更や上学校増も検討しなければならないが、極めて困難な問題である。近接する複数の学校の共用も含めた多用途運動場の確保は、バスでの送迎も含めても確かに困難ではあるが考えられないか。

⇒生駒市と他県も共通して言えるのは、身体は大きいのだが体力、運動能力が上達しない。持久力などの運動が不足、必要でないかと考える。又、柔軟性は怪我を防ぐ為にも必要であり、低学年より発達してゆく間に身体能力を高めることが必要だと思われる。

⇒部活は教師の負担の大きさ等を理由に行われていない。

⇒校庭解放は外遊びと安全性、そして責任論が交錯し、課題があるようである。

#### ●不登校・ひきこもり対策

⇒他校とも共通するが、カウンセラーの増加を行う必要がある。

⇒刈谷市の取り組みにあるように、学級・授業の改善はそもそも不登校児の発生を防ぐ効果がある。そのためには、担任の力量アップとともに、生駒台小で行われている学びのサポーターのように担任が授業に集中できる体制をとることも重要であり、増やすことを検討すべき。

4 教育現場の現状（体力向上の取組と不登校・引きこもり対策等）

平成23年11月2日(水)

視察先	奈良県生駒市鹿ノ台小学校
視察の目的	生駒市では、子どもの体力低下、不登校・ひきこもりが問題となっている。そこで、生駒市の現状を把握することが必要と考え、今後の本市の施策の参考とする。
施策等の概要	<p><b>●体力向上の取組み</b></p> <p>平成22年度の体力測定で、全国・県平均とも下回っていたのは、男子が握力・上体起こし・長座体前屈。女子は長座体前屈、50m走が同様に下回っていた。</p> <p>怪我の割合は、平成21～22年度は70件台で推移しているが、23年度は32件でやや少ない。これはどの程度の怪我までを医療機関に連れていくのかにより、数字が左右されるという。</p> <p>体力向上の取組は、育友会の協力を得て実施する外周駆け足、市町村対抗駅伝大会へ参加、外遊びの奨励などを行っている。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・鹿ノ台小学校は運動場を芝生化しており、土埃がしない、地表温度が低いというメリットと冬は滑りやすいというデメリットがある。外遊びを奨励している。特に、低学年は担任が外へ誘うようにしている。但し、芝生化による体力への影響は特にないのではないかとのこと。</li> <li>・11月マラソン納会に向け1ヶ月とって走る取組みを行うなどの体力向上の取組みを行っている。</li> <li>・土曜日に学校開放を行い、サッカーなどで利用されているが、参加は2割程度である。</li> <li>・体力に関しては、男子より女子の方が良い傾向にある。</li> <li>・ダンスは外部活動ではあるが、全児童の約2割が参加。</li> </ul> <p><b>●不登校・ひきこもり対策</b></p> <p>不登校は、平成21年度5人、22年度4人、23年度2人で推移している。地域的に幼稚園、小学校、中学校が一貫しており、小学校以前から続くトラブルを抱えているケースもあるという。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・関係機関と協力して対応している。地域のつながりが弱くなっていることとも関係しているのではないかと。</li> <li>・スクールボランティアなどにより、担任の先生の負担が軽減されている。鹿ノ台地区との連携を図り、町ぐるみで見守り活動を行う。</li> </ul>
委員の考察、意見等	<p><b>●体力向上の取組み</b></p> <p>⇒同校は市内唯一の芝生の運動場を保有している。夏場は地表温度が低く砂埃が立ちにくく、熱中症の予防にもなるという利点がある。難点は、</p>



朝方は露がつき、足元が滑り易くなる点。怪我をし難いのも事実で、総じて児童にはプラスとなっているのではという印象。

⇒運動場の芝生化は、メリット、デメリットが在るということであり、全面的にとはいかず、スポーツの種類も考慮し、面積、場所を検討した上での導入することが必要である。

⇒市内唯一の芝生運動場を最大限活用、例えば運動会の組み立て体操など土では固く怪我の恐れがあるが、ここは大きな技にも挑戦し、子ども達の能力を引き出している。ただしドッジボールは引き線が引きにくく使用頻度はあまりよくない。(白線ではなく、足でひく線)

冬、芝植えに2週間の養生期間が必要。水やり等、メンテナンスが必要

⇒学校として、マラソン納会のように全員の目標となる企画は運動への意識付けとなり、有効ではないか。

⇒低学年の担任による外遊びの奨励について、刈谷市での発想からも有効であると考えられ、他校の取り組みも含め、方法をさらに探求する必要がある。

⇒体育授業だけでは不足する運動を、中休み時間を活用している。担任は時間になると声をかけ、児童と共に運動場へと向かうようにしている。地域のジュニアスポーツ教室に運動場、体育館を開放し、多数の児童が活動している。

#### ●不登校・ひきこもり対策

23年度不登校は2名。担任、校長を中心とし保護者との連絡を取りながら教育相談室、月1回のカウンセリングを行う。ここでも校長が中心となり、担任との連携を図っている。

⇒不登校対策は、学校だけでなく、地域と連携した取り組みが有効かつ必要であり、関係部課とも連携して探求する必要がある。

⇒スクールボランティアなど学校・先生を支援する体制を強化する必要がある。

⇒図書室でのいきいきした子どもたちの多さには驚いた。小規模校の良さか、地域性か、特別な学校の取り組みが在るのか、探求する必要がある。